View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Waseda University Repository

第 2 章　少女時代・帰国から女学校卒業まで：(1929～1937)

本章では、台湾から日本へ帰国した歌の 10 歳から 17 歳までの時代を考察する。歌は、小学校 5 年から女学校卒業まで、母と姉妹と東京渋谷区初台の家で過ごした。その間に父竹次郎は単身台湾に残り、総督府調査課に在職しつつ、台北市に新設された台北帝国大学で理農学部非常勤講師として南洋経済を講じた。歌は、台湾の台北第一師範学校附属小学校から、東京の成城小学校へ 5 学年で転入し、 1 年間を過ごした後に受験のため渋谷区の山谷小学校へ転校し、同校を卒業した。その後に築地(現四ツ谷)にあった雙葉学園に入学し、女学校時代を過ごした。また、雙葉高等女学校に入学と同時に、上野の東京音楽学校選科（ピアノ）にも入学を許されている。

両親と兄・姉妹と過ごした台湾での生活は、歌の生涯を通じた原点である。それは、父が佐賀士族としての誇りを持ち続けたように、歌にとっても、「帝国日本のエリート」の誇りとして自然に育まれた。国家のために働く父の姿と日本の威光を重ね、また、附属小学校で受けた教育でも、常に、日本人としてのプライドを教えられた。総督府で責任ある立場に立ち南方調査の専門家として、その地位を固める父と、台湾在住の日本人家庭や、台湾人の名士夫人と交流する母や姉と上層階級の子女としての幼年期を過ごした。

父の娘たちの教育への配慮から、母と 3 人の姉妹とともに日本への帰国が決まったのは、歌が 10 歳の時である。当時台湾では、学生を中心に日本人への反発が強まっていた。植民地台湾の日本女性生活史に詳しい竹中信子は、自身が 1930 年に台湾で生まれ 15 歳までを植民地台湾で過ごし戦後帰国して武蔵野音楽大学を卒業した「植民地統治者の娘」としての経験を著書[1]に書いている。1922 年(大正 11 年)に台北師範学校に在籍する台湾人学生数名が学校近くの派出所で日本人の巡査に暴言を吐いた事件があり、当時、台湾人の学生たちの日本人への嫌悪と反日感情が広がっていたと指摘する。この事件で、警察は逮捕した学生たち 45 名を不起訴処分にしたのに対して、学校側は退学処分 15 名、無期停学 35 名、謹慎処分 608 名、自宅謹慎 15 名の処分を発表した。竹中によると、この事件が象徴的なのは、台北師範学校だけでなく将来を期待された台湾人エリートの学生たちが植民地支配の現実に不満を爆発させていったことで、こうした学校でのトラブルが続出した事実を記す[2]。このことから、竹次郎は娘たちの帰国に至った理由を具体的に述べていないが、父としての配慮から、家族の日本への帰国を決断したと推察する。

竹次郎自身が体感した大正デモクラシーは、児童教育の分野でも改革の動きがあった。新しい教育思想として注目された「自由教育運動」もその 1 つである。民本主義が広く浸透していく過程で、明治以来の学制による公教育から離れ、自由な発想で児童教育を見直そうとの動きである。東京の成城小学校で行われた「ダルトン教育」はその一環であり、5・

---

[1] 竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史　大正編』田畑書店、1996 年、211～213 頁。
[2] 同、213 頁。台北第一工業学校生徒全員の同盟休校事件や台南商業専門学校生徒の自宅引き揚げ事件。

6 年生に実験的に行われていた。大正期に登場した都市部の比較的裕福なサラリーマン層、医師、弁護士などの専門職からなる新中間層は、こうした自由な教育への意識が高く、成城小学校の教育方針へ賛同してその子弟を託した。竹次郎も、三女の歌を転入学させた。成城小学校で歌が「ダルトン教育」を経験したことは、歌自身の文章に残る。その当時の成城小学校は、海外からの帰国子女や他校からの転入生も多く、卒業生の進路も多彩であった。歌は、国立音楽大学の教授となってからも子供時代を振り返って「成城が好き」と、門下生に話している。わずか 1 年間という短い間であったが、成城小学校での思い出は、生涯忘れがたいもので、同窓会誌にも度々寄稿している。歌の同級生は、歌は自由でのびのびした小学校時代を過ごしたと証言する[3]。成城小学校が教育の柱とした「自由」と「自発性」は、歌の資質として大きな影響を残した。

しかし、女学校への進学を理由に成城小学校から地元の渋谷区立山谷小学校へ転校し、同校を卒業した。当時の学籍簿の公開は、個人情報保護法の規定により叶わなかった。その後、姉たちの通う雙葉学園へ進学した。女学校入学の年の 1932 年（昭和 7 年）[4]は、政治も社会も大きく右へと旋回する。大正末期から昭和初期の自由で開放的であった女学生生活も一変する。歌の女学校時代は、日本を取り巻く内外の政治や社会の動きが厳しさを募らせ、歌が女学校を卒業した 1937 年（昭和 12 年）は、日中戦争が勃発し、戦争は現実になる。日本中が軍国主義一色に染まり、国家総動員体制下、戦争の時代に入る。しかし、歌は、女学生としての勉学を続けながら、水道橋にあった東京音楽学校の選科でピアノのレッスンを続けた。卒業の前年に父竹次郎台湾から帰国し、一家の団欒は戻るが、歌の青春前期である女学校時代は、戦争の時代であった。

第 1 節　帰国へ

1）帰国の理由

原口歌は、1929 年（昭和 4 年）に台湾から帰国した。総督府統計官として責任ある立場にあった父は、1 人で台湾に残り、母と 3 人の姉妹だけの帰国であった。帰国を決めたのは、竹次郎の娘たちの教育への配慮と考えられる。帰国を決めた理由について竹次郎が述べた記述はない。また、歌の遺品にも帰国理由を推察できるようなものはなかった。

歌が生まれた 1920 年頃は、台湾統治もほぼ四半世紀になり、教育環境は初等教育から中等教育へ次第に整備された。しかし、初等教育を終えた内地人子女には、中等教育のための女学校は数が限られ、台北市にある総督府女学校だけで、そのうえに最難関校であった。

---

[3] 白石露による。白石は、原口歌と同じ成城小学校楠組で一緒に過ごした。歌は 5 年生からの転入であり、また、卒業間際に受験のために転校していったので、初めは記憶がないといっていたが、次第に当時を思い出し、参考になる話を聞くことができた（2011 年 9 月 29 日に聞き取り）。

[4] 1932 年（昭和 7 年）に満州国が成立した。5・15 事件があったのもこの年である。

竹中によると、1920 年次に総督府高等女学校を受験した生徒の半数が不合格であり、エリート小学校といわれた附属小学校出身の受験生も、約半数が合格できなかった[5]。さらに、竹中は、「台北市が日本の都市のなかで一番教育程度が高く知識階級が多い」と台北市の特殊な状況を指摘する。女子の中等教育の場として総督府高等女学校が創設されたのは、1904 年(明治 37 年)であり、当時から選ばれた家庭の子女のみが入学を許された。台湾の女子教育事情[6]をみると、小学校卒業後の中等教育としての高等女学校は、1921 年時点でわずか 4 校に過ぎない。

台湾では、歌やその姉たちが小学校を過ごした 1920 年代に入ると、日本が台湾統治直後に導入した学校制度が普及し、一応定着した時期と考えられる[7]。台湾の教育は、統治開始以来、初等教育の普及が中心で、台湾人の開化を主たる目的とし、国語教育がその中心であった。そのために学校教育は、その始まりにおいて、日本人と台湾人を別学としていた[8]。日本人子弟のための中等教育の始まりは、林によると、当初は 2 校に過ぎなかった。男子校と女子校のそれぞれ 1 校ずつ、いずれも国語学校の附属校で、男子は「国語学校中等部」、また女子は「国語学校第三附属高等女学校」との名称である。男子中等部の開設は 1898 年で、1 クラス 10 名で始まり、5 年以上の修学年限であった。1907 年には中等部が廃止され、台北に最初の台湾総督府中学校が設立された。女子については、1904 年に開設された、「国語学校附属高等女学校」が最初の日本人女子のための中等教育機関であるとされ[9]、同校では、日本本土の公立高等女学校と同様の教育が施された[10]。

歌の誕生した頃は、台湾人社会の安定と経済的な発展もあり、台湾人の教育への意識が高揚した。1919 年に文官総督として赴任した田総督の意向で教育令が見直され、台湾人と日本人の共学が可能になった。台湾における教育方針が当初から差別的であったのは、台湾人を日本人と区別した結果であった。しかし、卒業後の進路にも影響することが次第に台湾人自身に強く認識されるようになり、教育差別撤廃が台湾人から総督府への請願として出され、台中中学建設運動となるのは、台湾人自身の覚醒でもある。これが、日本人と台湾人の共学への端緒となった。林は、次のように当時の台湾人の意識を説明している。

---

[5] 竹中信子、前掲書、190 頁。

[6] 林茂生『日本統治下の台湾の学校教育』拓殖大学海外事情研究所華僑研究センター、2004 年、102 頁。

[7] 林、前掲書、90～93 頁。

[8] 台湾の初等教育のための学校は、日本人の子弟は「小学校」、また、台湾人は「公学校」と呼ばれ区別されていた。

[9] 「台湾総督府中学校附属高等女学校」は、1905 年「台湾総督府高等女学校」と改称されたが、大正時代に入り、台南に高等女学校を設置したため、「台湾総督府台北高等女学校」と再び改称されるが、さらに 1919 年(大正 8 年)設立の「台北公立高等女学校」と区別するために、1921 年(大正 10 年)に「台北第一高等女学校」と改称された（竹中、前掲書、118 頁）。

[10] 台湾人の子女の女学校としては、「台北州立第三高等女学校」があるが、これは、艋舺の国語学校女子部で、台湾では最も古い女学校である（竹中、118 頁）。

教育を受けた台湾人民は、自らの才能を十分伸ばし、心から台湾の利益を守り、祖国の産業文化を発展させるための指導者を産むための同等の機会を求めた。さらに多くの台湾人学生が日本で学んだ目的はここにあった…台湾ではよい教育が受けられないということである。台湾で彼等に開かれていた学校は質が劣り、彼らに失望をあたえるものであった。学校の数は少なく、入学条件を満足する志願者の数はいつも定員を超過していた。台湾の学生は、日本人と同等の教育を受け、日本人と同等の教育を授ける学校を卒業して、現在日本人が独占している責任ある地位に就く準備をしたいと願った[11]。

1922 年の教育令改定後、台湾人と日本人との共学が許された。台湾人にとっても、1920 年代以降、女学校は 1 つのステータスで、入学できるのは台湾社会の上層階級の子女に限られていた。台湾女性史研究の洪郁如は、「台湾人の高等女学校への進学は、女学生の家庭の経済力と開明度による」[12]とし、公学校卒の娘でさえ「金持ち娘」と見られたのであり、高等女学校生となると資産家の家庭に限られたと述べる。また、植民地という事情から、上層階層に属する台湾人の家庭は、内地留学させるものも多かった。台湾人エリート家庭の娘たちは、日本人と同様の学校教育を受けて「上流婦人」としての礼儀作法やスポーツ、音楽、文学といった幅広い教養を身につけさせ、高学歴女性の文化の担い手となることを期待された。これは、学歴を重視する日本人エリート層と共通する意識である。

しかし、進取的な女学生が憧れであった一方で、台湾でも女学校の教育現場で新旧の対立や価値観の交錯があった。竹中は、具体的に当時の教育を巡る父兄の混乱を述べている。女学校での制服の変化や、修学旅行を巡る教師と父兄の対立を、「1919 年（大正 8 年）頃、女学生の服装がそれまで筒袖に海老茶袴の長いものに変え、袴の丈をうんと短くして、腰巻ではなくパンツを・・・下駄や草履を廃して靴を履かせることに決め・・・」とある[13]。1908 年に総督府女学校に入学した女性には、時代の様変わりに衝撃をうけた。時代の変化を痛感させるものが、女学生の服装の変化だというのは、いつの時代も同様である。女学生の服装の変化について行けない父母からは、抗議が殺到し、女学生の運動競技参加にも注文をつけたという。また修学旅行に反対する父兄の 1 人は、台北高等女学校校長に対して、次のように抗議した。

我らは女生徒に安全第一主義を求める。旅行など危険があるかも知れないことをしてもらうのは余計なお世話だ。高女生は卒業後中等以下の人々の妻と嫁し、夫に従うのほかなく、生活状態は夫次第だ。自己を社会の一単位として共同生活を為さねばならないことなど絶無といっても良い。郊外教授の効能など教育家の誇大妄想に

---

[11] 林、前掲書、152 頁。
[12] 洪郁如『近代台湾女性史』勁草書房、2001 年、156 頁。
[13] 竹中、前掲書、175 頁。

等しい。

これに対して校長は、「高女卒業後は中等以下ではなく、中等以上の人々の妻である。中等以上とは、収入のことではなく知識の水準である。真実、本校生徒の父兄であるならば、こんな人の子女こそ気の毒」と反論した。女学校生徒の親が、必ずしも進歩的とはいえず、保守的な価値観に固執するものもあった。竹中は、当時の社会についても、平均化された社会ではなく、「上下の差が激しく、経済面だけでなく、教育や意識の面でもどんどん抜け上がっていくものが輩出しはじめているときで、現状に疑問を持たず停止している人々とのズレの大きさが目立つ」し、また、「特に台湾の女学校は、当時の女性の進歩向上のパイオニアの面を備えていたから、何かと女子教育をめぐって、新旧思想の対立がみられる」と解説している[14]。修学旅行も女生徒の服装問題も、家では和服が主流の一般的な生活からは一種の無駄であり、伝統無視との意見も普通であった。

高学歴の台湾人子女に期待されたのは、日本人高級官僚家族と台湾人家族との一種の「夫人外交」である[15]。日本人統治層と台湾人上流層の利害の一致するところから、女性たちの社交能力が期待された。その意味では、台湾人の女子教育ははじめから上流偏重であり、台湾人自身に「女子教育＝階層身分シンボル」と認識されていた。「台湾人女子を主要な対象とした第三高女では、1925～40 年度の学生の父兄の資産は 5000 円以上の者が全体の 7 割」[16]ともいわれる。名門出身の家庭であっても、都市部に比べると農村部では「都会へ娘を出す」ことに躊躇がみられたのも現実であり、優秀でも親の理解と許可がなければ進学は難しかった。台湾人の女学生が、植民地統治下で「学歴エリート層」を形成したのがこの時代である。

日本人官僚家族と台湾人上層家族の外交の場としては、台湾愛国婦人会がその設立当初からあった。そこには、内地から赴任した高級官僚の夫人たちが「夫人の務め」として参加していた。

歌が誕生した 1920 年当時、愛国婦人会は下村宏民政長官夫人のトシ子が会長を務めていた。愛国婦人会台湾支部は、多数の台湾人からの会費を集めていたこともあり、台湾人の国語教育や、授産所での教育に尽力した。トシ子は、それまでの授産所を「女子職業学校」として新たに日本人女子と台湾人女子の共学の学校として発足させた[17]。そこでは、職業訓練校としての本来の役割だけでなく、日本人学生に台湾語を教えることもあったという。愛国婦人会の活動は多様であるが、歌の母も会員としてその活動に参加していたと考えられる。

しかし、狭い日本人社会では、夫人同士の些事に振り回されたと感じる夫人もでてくる。

---

[14] 竹中、前掲書、175～6 頁。
[15] 洪郁如『近代台湾女性史』勁草書房、2001，122～3 頁。
[16] 洪、前掲書、156 頁。
[17] 竹中、前掲書、183～184 頁。

竹中によると、内地人官吏の妻の交際は盛んで、虚礼ともいえるほど派手であり、中には「台湾逃げ」をする婦人が輩出する[18]事態もあった。経済的に豊かな台湾人上流階層の婦人たちと競う内地人官吏夫人の姿は、植民地台湾の特殊な状況である。

①台湾での女子の教育、②中・高等教育の実情、③日本人官僚夫人たちの生活事情が、竹次郎が家族を帰国させた理由の一端と考えられる。

帰国前後の台湾は、第１次世界後の好景気から、一転して不景気となり、経済恐慌が予感された。その象徴的な事件は、1927 年の台湾銀行の閉鎖である。既に 1920 年代は内地の不景気が台湾財政を逼迫させた。台湾銀行の全店休業は日本本土の経済に及び昭和恐慌の引き金になる。更に、ウォール街発の世界恐慌は不景気に追い打ちをかけ、台湾にも失業者が溢れた。

また、第１次世界大戦後の世界の潮流となった民主主義への希望と民族意識の覚醒から、日本では大正デモクラシーの動きとなった。当時日本に留学していた台湾人留学生が反植民地感情を抱き活動した。学生や失業者の暴行事件も目立った。

こうした時代背景が、原口家の家族の帰国にあり、原口姉妹が小学校を卒業後、台湾に残って高等女学校へ進学するか、あるいは日本へ帰国して進学するかの二者択一である。父として、竹次郎には、成長する娘たちにより多くの選択肢がある日本で教育したいとの思いがあったと考えられる。歌の２人の姉たちは、雙葉高等女学校へ入学させるが、三女歌は、成城小学校へ転入させた。成城小学校は、大正デモクラシー期に導入された新教育の実験校であった。明治の自由教育運動の流れを汲む、ユニークな教育方針で知られていた学校である。

２）「自由教育運動」と成城小学校

日本近代史家の鹿野政直（1931～）は、「自由教育運動」を民本主義の１つの運動と位置づけ、以下のように述べる。

> 民本主義的な文化認識は、教育の改革への関心や機運を引き起こさずにはいられませんでした。教育は民本主義の人間的基礎を作る仕事だったからです。吉野作造は、「憲政の本義」論文と同じ号[19]の『中央公論』の「社論」欄に、「精神界の大正維新」という文章を寄せ、文教政策を「我文部省の目的は、青年子弟の思想感情を一定の鋳型より打ち出さんとするに在り」と批判しました。この気分は、児童と接する小学教師たちにしだいに共有のものされはじめており、各地で自由教育運動として実践されてゆきました。児童の内発性を引き出そうとする自由教育運動の核心とされたのは、綴方教育と児童画教育でした[20]。

---

18 竹中、前掲書、193 頁。
19 1916 年 1 月号、筆者注。
20 鹿野政直『近代日本思想案内』岩波書店、1999 年、170 頁。

自由教育運動の流れを汲み、成城小学校が取り入れていたドルトン・プランは、大正デモクラシー期に興った教育改革をめざした「新教育」の１つである。ドルトン・プランとは、アメリカの女教師ヘレン・パーカーストがマサチューセッツ州ドルトン町立中学校で1920年2月より行った自学自習を中心とした教育法である。それまでの学級単位で教師が指導するというのではなく、児童の内発性に期待し、教師はその自主的な行動を支えるとの立場を取った。既成の学科を規定された条件で「教える」のではなく、一人ひとりの児童の能力に応じた自由な教育を目指した。私立成城小学校を創設したのは、元京都帝国大学総長沢柳政太郎（1865～1927）である[21]。明治末期から盛んになっていた新教育運動の高揚期に生まれた私立学校であった。個性の尊重、自然教育、鑑賞教育、科学的研究を柱に、春秋二季の入学、能力による超級（降級も）、30人クラスを実施。さらに、教科書やカリキュラムも独自のものを使用した。生徒は一斉授業に加えて個別の授業を受け、各自が「進度表」を持っていて、学期末に達成を確認した。生徒への自由度がきわめて高いのは、子供の能力や自発性を認めようとの教育方針からである。沢柳校長とこの自由教育を推進したのが、後の校長であり、全人教育論で知られた小原国芳（1887~1977）主事（後、玉川学園創設）であった。1921年8月に行われた大正新教育の高揚を象徴する「八大教育主張」は、近代日本の教育史で記憶される出来事とされた。この時に成城から小原が講演し、「全人教育」[22]として、その後の成城の教育の代名詞ともなった。

原口歌が台湾から帰国し、転入生となったのは、成城5年生の楠組である。以下は、原口歌自身が書いた「小学校5年生のときの思い出」[23]である。

> 私は台湾台北市に生まれて、小学校4年生まで台北に居り、其の後東京に移り、成城小学校に轉校して楠組に入れて頂きました。そして、5年生の1年だけお世話になり、6年生のとき、近所の区立小学校に又、轉校しましたので思い出は5年生の1年間だけです。
> 当時、成城は見渡す限りの広野で、駅から学校まで、さえぎるものもなく、徒歩で10分ぐらいのところを、私は仲良しの野口八咫子さん方と、ぶらぶら道草を食いながら30分もかかって歩いたことを思い出します。
> 昭和5年とゆう年は大雪の年で、台湾生まれで雪を知らなかった私は生まれて初めての雪に狂喜し、道ばたに積もった雪をたべながら歩きました。
> 楠組に入った最初の日に、浜野ジュリヤスさんが自習の授業時間にナイフでしきりに切腹の真似をなさり、それが全く真に迫って居るので感心して見て居りまし

---

[21] 沢柳政太郎は、貴族院議員で東北帝国大学を創設（1911年）、その初代総長を務めた。また帝大で初の女子の入学を認めている。その後（1913年）、京都帝大の総長となるが、辞任した。1917年（大正6年）私立成城小学校を設立した。沢柳は、成城小学校を大正新教育運動の中心に育てた。

[22] 成城学園50年史より。

[23] 成城小学校第11回卒業、『三樹』50年記念号、1972年。

た。今でも、はっきり覚えて居り、切腹のあと、息が絶える最後はほんとうに名演技でした。又、福本さんは秀才で、あるとき私に「君のお父さんは早稲田大学の教授だろう？大山郁夫の親友だろう？大山は、僕の伯父だよ」と仰言ったことを思い出します。劣等生である私は、授業中勉強しないでキョロキョロして居りましたが、福本君は落ち着いて勉強に集中なさって居られました。52 年も経過した現在も尚、名簿を見て居りますと、クラスの一人ひとりをよく思い出します。それは、私の記憶がよいとゆうよりも、楠組の皆がそれぞれ、非常に個性的で、強烈だったからだと思います。
組が変わって居りましたから、当時は知りませんでしたが、私はその後、雙葉高女に入学し、副島艶子さんとご一緒になり、また、芸大へ入学して、作曲の小林福子さんとご一緒になりました。小林さんは桐朋の教授になられ、私は国立音楽大学で教えて、はや 29 年の歳月が流れました。仕事の関係で小林さんとは時々お逢いしますが、なつかしさでいつも胸いっぱいです。僅か一年間の在学だったにも拘らず 52 年も経過した今日まで、毎年欠かさずクラス会の通知はじめ、ご連絡をくださり感謝にたえません。皆様のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げて居ります。

原口歌は、このほかにも 2 通の短いものであるが、同窓会誌に記事を残した。いずれも、当時の生活を懐かしく思い出したものである。そこには、当時、歌が転入した楠組の担任柴田勝先生についても書かれたものがあり、同級生たちから慕われた様子が伝わってくる。秋田から新任で、初めて担任した柴田勝先生については、歌と同じ楠組にいた白石[24]からも印象的な先生であったと聞いている。以下が、原口歌自身が残した文である。

然る 7 月に三樹会の御知らせを頂きましたが、その中に、「小学校を卒業してから 52 年余り」とあり、今更驚きました。人生を音楽一筋にあわただしく夢中で駆け抜けてきた私は、教えている生徒たちが、小・中・高・大学と皆若いので、自分でも一緒になって、若いとゆう錯覚があったと思います。でも新聞には「64 歳の老婆、逃げ遅れて焼死」などと書かれて居り、私も立派な老婆になったと、がっくりときました。又、「残念ながらあと 30 年を待たずして三樹会は自然消滅」とあり、改めて、生と死について、考えました。「人は死ぬ、何故なら生まれてきたのだから」又、「ひとりで生まれてきたのだから、ひとりで死ななくてはならない」又、すべての出来事、運命に対して、「前世の因縁」とゆう、特に「御縁」とゆう言葉は大好きで、すべてを表現していると思います。京都に「国際学生の家」ドイツ語では「Haus der Begegnung」訳して、「出会いの家」とゆう、外国人留学生の寄宿舎がありますが、人生、人と人との出会いは即ち Begegnung は、御縁だ

[24] 白石露、前述。

と思います。
私が成城で御世話になったのは、5年生の僅か1年足らずでしたが、今更乍ら、学校と柴田勝先生はじめ諸先生方のすばらしさが身に沁みて感動を覚えます。このような優れた先生がた、御友達に出会えたこと、即ち、御縁があったことで、私の人生は非常に豊かになったと心から感謝申し上げて居ります。一つ一つの想い出は前の記念文集に書かせて頂きましたが、一番心に残るのは、やはり、柴田先生のやさしさと慈愛の深さです。他から見れば平凡な私の人生も、喜びも多かったけれど、多事多難波瀾万丈でしたが、仏教に深い信仰も生まれました。すべてを自然にゆだねることだとおもいます。「人生とは？」「人間とは？」「芸術とは？」たとえ「お料理とは？」と聞かれたら、私はそれは「愛」と答えます。そして、音楽家としては、「技術より、人間性が芸術の原点」だと思います。このような精神の境地に至ったのも、ひとえに柴田先生と皆さまのお陰です。先生はじめすべての御友達の御多幸を心から祈り申し上げて居ります。

柴田は、1930年に秋田より新しく赴任してきた教師として、成城小学校の機関誌『教育問題研究』46号の「学園便り」で紹介されていた。秋田なまりが特に印象的だったようで、歌の同級生[25]も思い出を話す。以下は、柴田の投稿である。

「楽しかった2年間」　柴田　勝
諸君との2年間の学生生活は、全く楽しいものであった。私が成城小学校の教師として参加したのは、昭和5年4月（1930）である。「教育の研究のために、私立成城学園に出向を命ずる」というのが、私が秋田県からもらった辞令であった。
毎日の学校生活は、それこそ遊びの研究みたいなものであった。香川県から来て、理科を担当していた松原という先生は私に言った。「こんな曇り空に、いかにも楽しそうに子供たちとかけめぐってあるく、君をみると、羨ましい限りだが、曇り空の多い東北から来たせいかね」と。
昭和7年3月、諸君は卒業していったが楽しく遊んだ諸君に学習時間をも遊びにふりむけてあそんだことについて、私は今もよかった、良いことをしたと、思っている。
諸君の仲間の中から、多くの戦死者や病死者が出ている。それらの人々に、私は、「楽しかったね」と言って、冥福を祈りたいと思う。

当時の成城学園へは、全国から教師が研究のために派遣されていた。新教育、ドルトン・

[25] 白石露は、歌について当時の様子を思い出してくれた。2011年現在91歳である。今も当時の同窓生が集まることがあるそうで、歌についての新しい「情報」と、同級生の加藤武子さんは、新渡戸稲造の孫と同じ組であったと知らせてくれた。

プラン、全人教育、自由教育といった言葉が当時の児童教育の現場で注目されていた。大正デモクラシーが、それまでの女性やこどもへの認識に変化をもたらした結果であり、成城小学校は、早くからその実践を教育現場に取り入れた。しかし、このダルトン・プランは失敗に終わった。卒業生が当時を振り返って、「・・・イージーな方向に流れろと言った教育で・・・一対一ではあったが、勉強すればいいけど、しなくても卒業できるということでした。そのため、子供の目から周りの友だちを見ても、甚しく学力の差がわかりました」と失敗の理由を挙げている[26]ように、子供への信頼が却って放任主義になって学力差が生まれ、規律のないまま自由のはき違えから自滅していった。また、時代も自由な個人尊重から、次第に全体主義の様相を明らかにし、教育も例外ではなく、私学も官憲からの圧力をうけるようになった。

進学を目指す生徒は、成城での学力不足を不安視して、転校して行ったものも多かった[27]。しかし、歌やその同級生たちの多くは、卒業後の同窓会誌に「成城小学校時代が一番楽しかった」と書いている。歌も「成城が好き」と門下生に語った。

第２節　雙葉高等女学校

歌が 5 年間通学した雙葉学園であるが、個人の記録である学籍簿や当時の様子を知る手がかりとなる関連の資料は、戦争末期の空襲で焼失した。本章では、雙葉高等女学校がどのような学校であったかを学校史で辿る。また、大正期から昭和初期のいわゆる「女学生」について、一般的な姿を考察し、女学生の歌をイメージする手がかりとしたい。

１）雙葉高等女学校

原口歌は、1932 年（昭和 7 年）に渋谷区立初台の小学校を卒業し、同年 4 月に雙葉高等女学校へ入学した。女学校時代の資料を求めたのであるが、戦災で焼失した旨の書面での返事を頂いた。以下、その文面である。

> 前略ご免ください。
> この度　原口歌様の学籍簿についてのお問い合わせが同窓会に届いたようです。ところが学籍簿等については学校が取り扱うものですので、書類一式学校へ廻ってきました。
> 同窓会の名簿を見ますと、原口様は昭和 12 年雙葉高等女学校を 27 回卒業で、原口歌子様と記載されています。卒業生に間違いないと思いますが、学籍の記録は残っておりません。70 数年も前のご卒業でその後、学園は戦火で全焼しております。ご

[26] 『成城教育』昭和 45 年 6 月 11 号「牛込の成城・砧の成城」より。
[27] 白石の聞き取り。

要望にお答えできませんこと、ご了解くださいませ。お送りいただいた原口様のご経歴を拝見しますと、大変ご立派なピアニストでいらっしゃったようでご生前にそのご活躍を伺うことができず、残念でございました。原口様の御寄贈が貴研究所のご発展につながりますよう、お祈りしております。・・・取り急ぎまして右お断り失礼します。　　雙葉高等学校

雙葉高等女学校の同窓会誌は、遺品の中に３冊見つかった。当時から親友として、晩年まで交流があったと思われる歌の友人[28]がいるが、返信はなく、女学校時代の歌について聞き取りもできなかった[29]。アルバムに、雙葉女学校の修学旅行の写真と思われる（制服姿の集合写真）があったが、本人を特定できなかった。また、歌はしばしば、アルバムに自筆の書き込みをしているが、雙葉女学校関連と思われる写真にはその書き込みもない。門下生の１人で遺言に記載のある吉浦美知子[30]から聞き取りをした際、女学校のことを聞いてみたが、当時の歌は、雙葉が嫌いだったらしく、「私は活発でやんちゃだったのよ」、「しとやかでお行儀のよい生徒とは、馬が合わなかった」と話したと証言した。歌が 5 年間を過ごした雙葉高等女学校は、明治期に語学のお稽古所として創設された語学校であった。その後、フランスのサン・モール修道会が学校経営することになり、雙葉学園が創立した。どのような教育であったか、学校史が参考になる。

雙葉高等女学校は、1909 年（明治 42 年）に誕生した。当時高等女学校設置のための認可申請に際しては、宗教教育とは無関係の学校とすることが 1899 年（明治 32 年）に出された教育宗教分離令[31]で命じられていた。学校史によると「新しい学校として出発する際の大きな問題点は教育宗教分離令なるもので、日本が高等女学校というものに宗教を施すことを認めていない点であった」とあり、ミッションスクールにすると認可が受けらないとして、苦渋の決断であったと学校史に記されていた。さらに、設立の準備に際しては、華族女学校の教授、女子高等師範学校校長、女子語学校の教師ら３者が話し合い、文部省の認可を最優先にすることで学校設立へ働いたと書かれている。「フランス人校長メールは『日本人らしい日本婦人をつくること』を目的とされ、宗教教育は行わない」との念書を提出した。1909 年に雙葉学園の前身である女子語学校のあった築地で開校となるが、新校舎は麹町で着工になった。校長メールが私財を投じて、土地の買収資金に充てている。木

---

28 歌のもとに残された書簡から、服部学園お茶の水美術専門学校の創立者の服部八千代である。服部は「京都国際の家」でも原口歌との関係をもち、同時にクリスチャンとして生涯の友であった。歌の葬儀にも讃美歌を歌ったことを、麻布教会の信者の前田から聞いたが、既に亡くなったとの話で連絡はとれなかった。

29 最晩年、服部八千代と歌との関係が切れたと聞いた（麻布教会関係者から。2011 年 11 月 18 日）。

30 吉浦美知子は、原口歌の門下生であり、最も身近な教え子であった。2011 年 8 月 10 日聞き取り。

31 雙葉高等女学校の前身である女子語学校は私立学校令によって各種学校となり、東京府の認可を受けた年に出されている。

造 2 階建てルネッサンス様式の堅固で、重厚な建築物であり、甲武線（現総武線）の四ツ谷駅すぐそば、当時話題になるほど立派な校舎であった[32]。さらに 1911 年には地下 1 階・地上 3 階だての聖堂が建設され、ジャンヌダルクの像がフランスより贈られた。敷地の周囲は赤いレンガ塀がめぐらされ、鉄製の飾りがあった。この塀だけは、現在も残っているが、その他はすべて、戦火で焼失した。校舎内部の様子も、「暖房はスチームで、まだストーブも行き渡らず、火鉢を使っていたところもあった時代に珍しがられた」と記載がある。歌が入学時には、さらなる校舎の改造もあり、雨天体操場を割烹室に、さらに家事実習室も増設して、最新式の設備で評判になった。また、家事実習室は電気設備が備えられ、生徒の安全を配慮したものと書かれている。制服は 1927 年（昭和 2 年）にきめられ、5 年後には、各自手縫いの体操服が決められた。学校史には、フランス大使の訪問や、フランス東洋艦隊司令官が頻繁に来校したことが書かれ、フランスとの関係の深さを知る。

雙葉高等女学校は、その設立当初からカトリックの修道会が母体であったが、宗教教育に拘らず、「日本人らしい日本人をつくる」との目標を掲げた[33]。選ばれた家庭の娘たちの学校として、その地位は独自なものであった。設立当初から、「ミッションスクール」との名称を選ばず、文部省認可の高等女学校として出発し、その教育においても、日本的なカリキュラムも尊重し、宗教教育を課外として扱ったのは、他のミッション系の女学校とは一線を画し注目される。しかし、外国人教師も多く、外国語教育には格別の力をいれていたのは、他のミッションスクールと同様である。

女学校時代の歌にとって、政治を意識させた大きな事件があった。それは、歌が卒業を迎える前年（1936 年）に起こった 2・26 事件である。事件のあった桜田門から四ツ谷の雙葉女学校までわずか 4 キロほどであり、学校史にも当時のことが記録されていた。学校史をみると、2 月 27 日に東京全市に戒厳令が出されたが、授業は行われている。2 月 28 日は第 2 時限で授業は中止され、学校は陸軍測量部に、職員室と応接室を提供した。2 月 29 日に、朝から交通が遮断したが、午後 2 時に兵士の帰順により混乱は終了し、午後 4 時には平常の交通が回復した。前夜の 28 日には、第 14 師団第 59 連隊本部となったと記録されていた。

歌は青年将校の決起を知ったのは、卒業をまじかにした 15 歳の時であった。日記や手紙など当時の資料がないことが惜しまれる。この事件の翌年、1937 年（昭和 12 年）正月に、父竹次郎が帰国、母と娘だけの生活から久しぶりに父のいる団欒が戻った。娘たちの安堵は、大きかったのではないだろうか。

20 年の生活を終え、竹次郎が帰国を決めた理由は、後藤の研究に詳細な分析がある。一

---

[32] 『雙葉学園 80 年の歩み』1989 年、46 頁。

[33] 新しい学校を作る際の問題点は教育宗教分離令があったことで、高等女学校に宗教教育を認めなかったことがある。宗教教育を施すミッションスクールとすると、高等女学校の認可がおりなかった。そのため、創立者メール・セン・テレーズは、日本人らしい日本人を作ることを目的にし、宗教教育は行わない、強制ではなく、シスター方の様子から自然に神へのこころが芽生えてくるのがよい、とされた。前掲書、39 頁。

家が久しぶりにそろって暮らした初台の家は、竹次郎が精根こめて建てた家であり、思い入れが深かった。後年、戦災で焼失するが、南洋材をふんだんに使った大きな洋館であったと記されている。歌にとっても、少女時代の父を身近に感じた家であった。

この家から、歌は女学校に通うと同時に、東京音楽学校選科に入学した。歌が東京音楽学校選科入学と、自身の履歴に書いていたので、女学校との併行が可能かどうかを東京芸術大学音楽部（元東京音楽学校）に問い合わせたところ、当時、選科がお茶の水にあり、「週3時間以内のレッスンをしていた」との回答があり、女学校に在籍しながらレッスンを受けることが可能であった。

日中戦争の勃発で戦争が現実となったが、竹次郎の帰国で一家そろって少女らしい時代を過ごした時代であった。

２）「女学生」という表象

高等女学校が誕生したのは、1899年（明治32年）の高等女学校令による。高等女学校は、当時男子の旧制中学校に対応する女子の中等教育機関として位置づけられ、学制で定められた初等教育である尋常小学校を卒業後の進学校としての正式名称である。1910年（明治43年）に高等女学校令が改定されてからは、全国的に広く普及した。文部省年報によると、1910年は女子の尋常小学校への就学率がほぼ100%とあることからわかるように、明治の教育目標はこの時点でほぼ達成した。しかし、中等教育である女子の高等女学校への進学率は、1905年（明治38年）が5%以下、1920年には９%、1925年には15%まで上昇しているが、まだ初等教育止まりが一般的であった。女学校の数は、1910年には193校であったが、1920年には2倍に、さらに1910から1925年では5倍以上に増加し、これは男子校を上回るほどの勢いであった[34]。しかし、高等教育機関である、高等師範や女子専門学校となると、戦前期では1%に満たない進学率である。このことから、女子にとっての最終教育機関として高等女学校が理想とされ、大都市圏から次第に地方都市へも拡大していった。

当時の高等女学校の一般的なカリキュラムは、修身、国語、外国語、歴史地理、図画、家事、裁縫、音楽で、課外教科にピアノ、琴、茶道、華道が盛んであった。特に、都市部の女学校は「モダン」「ロマンチック」というイメージができあがった。大正デモクラシー期に登場した「新しい女」の生き方が社会的な認知を得て、「モダン」な女性像として女学生の憧れになる。しかし、依然として伝統的な女性のたしなみも厳しく教えられた。様々な価値観が交錯する大正末期から昭和初期にかけての時代に、若い女学生にとって、女学校時代は、結婚前の一種の「モラトリアム」であった。社会教育学者の稲垣恭子は、1931年当時の女学生の日記をこのように紹介している。

卒業したら就職困難の苦痛もあるし、家にいてぶらぶらしていることの苦痛もあれ

[34] 稲垣恭子『女学校と女学生』中央公論新社、2007年、6頁。

ば、遠くへ行くことの出来ぬ家庭の事情、それに就職したとしてもいわゆる先生タイプ、オールドミスタイプの女教員になるのはイヤだ。むしろ平凡な結婚をした方がいい。いや結婚と言えば青春時代の結末で、結婚は墓場なりとか言った人もあるくらいだ。してみると学校を出て、就職もせず、結婚もせず、ブラブラしていられれば一番いいのだが、家庭の事情、世間の体面で、そんなわけにはいかない。どうしたらいいのだろう。ピアノでも買ってもらって、その他茶道など続けて芸術に没頭してゆくなら、独り身の憂さも拭えるかもしれない。けれどもそれは余りにも具体性のないことだ。・・・いま楽しんでおかなければ、もう楽しい、麗しい時ってないんじゃないか？[35]

これは、1931 年（昭和 6 年）に高等女学校を卒業して高等師範学校へ入学した、当時としてはエリート女学生の日記である。女学校で教えられたのは、家事や裁縫はもちろんだが、中流以上の女子に期待されたのは、常識や教養の涵養があった。女学生は、課外や部活動以外に、茶道・華道・琴といった従来からの稽古事へ通うのが普通であり、ピアノ・コーラス・絵画も人気であった。女学生の「教養志向」は強く、また、新しいものへのあこがれから、ピアノ人気は高かったとの指摘がある[36]。ピアノと女学生は、当時、よく読まれた小説でも「山の手の令嬢」イメージとして登場している[37]。稲垣は、ピアノはまだまだ高価な楽器で、ピアノの稽古に通うことができたのは限られた層であった、と指摘する[38]。ピアノは、大都市、特に東京中心に成立していた新中間層[39]の好む「モダンな西洋風」生活スタイルの象徴であった。モダンな生活への憧れが強い当時の女学生は、外国語だけでなく、音楽、ことにピアノやオルガンを必須教科に指定するミッション系の学校を選び、女学校＝ミッションブランドであった。

しかし、女学校の教育目標として掲げられたのは、「女子ニ須要ナル高等教育・・良母良妻タラシムノ素養ヲ為スニ在リ。故ニ優美高尚ノ気風、温良貞淑ノ資性ヲ涵養スルト供ニ、中人以上ノ生活ニ必須ナル学術技芸ヲ知得セシメルヲ要ス」とあり、卒業後は結婚、家庭夫人となるべき教育であった。旧来の家事や裁縫の実用的な「技術」と、伝統的な「たしなみ」としての茶道・華道・琴を教えることが、女学校の存在理由の第一義であった。女学校が全国的に普及する 1930 年頃には、こうした伝統的な稽古事からも「師匠」になって職業としていこうとするものも目立ち始めた[40]。稽古事が単なる「教養」や「趣味」といっ

---

[35] 稲垣、前掲書、26～7 頁。
[36] 同、24 頁。
[37] 漱石の『それから』『門』、吉屋信子『花物語』、「ピアノを弾く女性のイメージ」が当時の「モダンで上品な令嬢」を象徴するものとして登場した。
[38] 同、29 頁。
[39] 稲垣は、東京の官公庁・銀行・企業に勤務するサラリーマンや、医師や弁護士などを「新中間層」とした。
[40] 鈴木幹子「大正昭和期における女性文化としての稽古事」『女の文化』岩波書店、2000 年。

た域から、「必要な技量」となって意識されてくる。女学生たちの目指すところが「結婚」だけでなく、広い意味で「経済的自立」が意識されていたとみることができる。

「女学生」は、高等女学校令以降、大正から昭和初期にかけて次第に一般化していったが、女学生への社会の批判は甘くはない。その批判は、良妻賢母主義から逸脱しようとする女生徒の行動を「堕落女学生」と排除し、西洋的「教養」を志向しようとするものを「虚栄」と決めつけた。新しい知識を純粋に喜び、魅了されている女生徒にたいして、「軽薄」「怠惰」という批判である。稲垣は、こうした社会からの女学生批判の前提として、大正期の「教養主義」を挙げる。

「教養主義」の成立について、鹿野政直は「教養主義」の担い手を大正期に誕生した「知識層」とした。明治が主導した学制と公教育制度が、19 世紀末までに、義務教育段階での就学率をほぼ達成し、その結果、中等教育、さらに高等教育へと学生層の拡大に至ったのが 1920 年代とされた。「学校出」という、制度化された教育から誕生した学生が輩出された[41]。その中でも「学歴エリート」は、1906 年（明治 39 年）に新渡戸稲造が第一高等学校校長となったことを契機に広がった「学生文化」の担い手であり、学生たちの哲学志向、教養志向を一種の伝統にした[42]。天下国家を論じた時代から、国家と一定の距離を置き、自己の内部を見つめる哲学的・内省的な思考が好まれて、「流行」となった。

近代化を開始した明治期にも、西洋的知から出発して自己を内省する知識人が青年たちへ大きな影響力をもったのは自明である。大正デモクラシー期の知識人の多くが、キリスト教にひかれたのも西洋知への憧憬であり、海老名弾正が本郷教会で多くの学生を感化していったのも、高等教育をうける学生であり、新しく誕生してきた知識層であった。鹿野は、「教養主義が国家よりも人生を優先させる価値観を母胎として誕生」とするが、男子学生にとっても、人生を論じ、恋愛をまじめに考えることを許される「モラトリアム」であった。東西の古典が必須として読まれ、広く深い教養を学ぶことが学生に許された「特権」として社会的認知を得た。この流れは、戦前期から戦後へ受け継がれ、一高文化[43]は「学歴エリート」の象徴として浸透した。

1920 年から 1930 年代は、モダンが時代のキーワードであり、雑誌・映画・ラジオ[44]のメディアが「大衆モダン文化」を演出した。女学生も例外でなくモダニズムの影響を受けた。『少女倶楽部』『少女の友』に載ったファッションが好まれ、流行語も生まれる。女生徒の間では、実用の教科だけでなく、文学や芸術への憧れや、学問を追究しようとする「教養

---

41 鹿野、前掲書、158～159 頁。

42 稲垣（『女学校と女学生』）、竹内洋（『教養主義の没落』）は新渡戸稲造の校長赴任を一つの契機とする。鹿野政直は、1903 年の第一高等学校生徒の藤村操の華厳の滝への投身自殺を学生の教養主義の「幕開け」とし、以後の学生の哲学志向を説明している（『近代思想史入門』。

43 鹿野、前掲書、188 頁。これをささえたのが「岩波文庫」であり、必読文献を読破することが教養とされた。

44 ラジオの開局、1925 年（大正 14）であり、1930 年代は全国的に普及し、ラジオの時代であった。

志向」もまた、時代であった。女学生文化は、男子の学生文化に比べて、より強く社会的反感を買った。男子の学生文化が、人格主義や形式にとらわれていく一方で、女学生は即物的、より現実的志向であったことが「軽薄・虚栄・浪費」と反感を買った理由であろう。しかし、女学生にとっては、結婚前の「自由」を許された短い時間である。学生時代を広く豊かに楽しみつつ、モラトリアムを謳歌するのは男子学生よりも女学生の特権であった。

ミッション系の女学校へ通い、自宅にピアノをもち、東京音楽学校の選科で一流の教師からピアノを習うことができた歌は、多くの若い娘たちにとって憧れの「理想的」女学生の姿である。しかし、歌は、自身の生活を恵まれた特権と意識していない。幼い頃からピアノの個人教授が自宅を訪ね、家族皆（母、姉２人）がピアノを習っていた。また、雙葉女学校が「選ばれた」家庭からの子女が多いが、原口家も教養ある家庭として遜色ない。歌の生活は当時の女学生にとって「理想」でも、歌には「現実」の生活に過ぎない、自然なものであった。歌には、自身が憧れや羨望の対象であるとの認識はなかったと考える。

３）戦争へ

原口歌が高等女学校を卒業した 1937 年に、日中戦争が勃発した。これは、盧溝橋での日本軍と中国軍との軍事衝突であり、1931 年の満州事変を起点とするいわゆる「15 年戦争」であった。

歌の小学校時代から女学校卒業まで（1929 年～1937 年）は、日本社会が戦争への歩みを進めていた時代に重なる。1930 年代の日本は、ウォール街で起こった世界恐慌の余波を受け、経済不況が深刻さを増し、失業者が町に溢れた。農村では、特に東北地方は冷害によって凶作が続き、生活が立ち行かなくなり、娘の身売りや自殺も頻発した。時代の趨勢は、自由な社会から一転して、ファッショ化へと方向転換をした。

戦争は、女性や学生をも巻き込み、その生活を制限した。戦時下で存在を強めたのは婦人会であった[45]。日露戦争後にできた愛国婦人会と、大阪の一主婦が起こし、全国的な組織となった国防婦人会は、その会員数を競っていた。愛国婦人会は、その成り立ちから名士の婦人を母体にして、皇室とのつながりを強調していたのに対して、国防婦人会は市井の市民の有志によって盛り上がり、時代の流れに乗って一挙に全国へと広がったものである。

愛国婦人会がその下部組織に「愛国子女団」をもっていたことは、女学生との関わりで注目してよい。子女団は、愛国婦人会がその大衆化路線の１つとして、高等女学校の生徒を組織したものとされている[46]。軍隊の出征を見送るだけでなく、千人針や慰問袋の制作を勧め、愛国婦人会の実働部隊として支えた。藤井によれば、愛国子女団の結成第１号は、1934 年の県立広島高等女学校においてであった。軍隊の師団を抱える都市からやがて全国

---

[45] 婦人会は、日露戦争後から大正デモクラシーの時代に、女性が「家の外」で活動の場を求めたのが運動の発端で、特に富裕層の婦人たちが社会奉仕として始めたのが愛国婦人会であった。その後、大阪の一主婦がはじめた、兵士の見送りや出迎えを支援する運動から発展拡大したのが国防婦人会である。昭和期には、更に官制の連合婦人会もできた。

[46] 藤井忠俊、『国防婦人会』岩波書店、1985 年、101 頁。

の高等女学校へと組織が進んでいった。愛国子女団は日中戦争直後に拡大し、1940 年には 2115 団 49 万人になった[47]。雙葉高等女学校の学校史によると、1941 年（昭和 16 年）に報国団の結成式があったと記されている。また、慰問文、慰問袋、勤労奉仕、防空・防火非難演習が日常的に行われ、「軍人下帯折畳作業がはじまり、10396 本納入した」との記載もあった。雙葉の女学生も、陸軍省での勤労奉仕や古いレコードの回収、古レコード針を集める作業をしていた。1945 年には、「4 月 13 日夜半から 14 日未明にかけての空襲で校舎が被災し、幼稚園、小学校、高等女学校、寄宿舎、修道院、聖堂、すべて焼失」と記されていて、学園の受けた傷は大きかった。

女学生が「モラトリアム」を謳歌した時代は過ぎ、戦争協力へ一色に染まった。原口歌が、実際に千人針や慰問袋を作ったかどうかは不明である。しかし、言論の自由を次第に奪われ、ピアノを弾くことも次第に制限されていった。

[47] 同、102 頁。